異性装をとおして見た近世ヨーロッパの民衆生活とジェンダー

大木　昌

この報告は、Rudolf M.Dekker & Lotte van de Pol, *The Tradition of Female Transvestism in Early Modern Europe*, London, Macmillan, 1989（邦訳『兵士になった女性たち―近世ヨーロッパにおける異性装の伝統―』大木昌訳、法政大学出版局、2007 年）を手がかりとして、近世ヨーロッパにおける民衆の生活とジェンダーの問題を考えることを目的としている。本書は、17、18 世紀のヨーロッパ、とりわけオランダ、イギリスなど北西ヨーロッパには、男性の服装をして男性の職業（主に兵士や水夫）に就いた異性装の女性たちが多数いたこと、なぜそのような現象がとりわけこの時期の北西ヨーロッパに現れたのかを検証することであった。このため著者たちは、17、18 世紀のオランダの裁判記録から 119 人の異性装者の事例を取り上げ、さまざまな角度から異性装の背景や意義についての検討している。異性装の歴史的な研究はほとんどなく、この意味で本書は非常に野心的な試みであるといえる。

本書の主要なテーマである異性装は、社会的に決められた性別役割（ジェンダーロール）の壁を越えるという意味で、ジェンダーの問題であるといえる。しかし本書は、ジェンダーの問題をとおして、いわばその副産物として、通常の歴史ではあまり取り上げられることのない、近世ヨーロッパ社会および民衆の日常生活について興味深い実態をも明らかにしている。そこでこの報告では、ジェンダーの問題に配慮しつつも、上記の書物に現れる近世ヨーロッパの社会史的な側面に注目して検討することにしたい。

まず著者たちは、異性装の動機としてロマンティックな動機（夫や恋人を追って）、愛国的動機、経済的動機などを挙げている。これらのうち、ロマンティックな動機とは、戦争や海外に出て行った夫や恋人に会うために男装する場合を指す。愛国的動機とは、祖国を救うために自ら男装して兵士として戦争に加わろうとする動機である。当時のヨーロッパ諸国はヨーロッパ内部でも、海外においても互いに覇権争いを繰り返しており、このような状況が異性装の背景になっていたことは間違いない。当時は女性が戦争に参加することはなかったが、ヨーロッパにはジャンヌ・ダルクのような事例は広く知られており、女性も国家の危機に際しては立ち上がるべきであるという伝統も大いに影響していたものと思われる。

しかし、異性装の大部分の事例は経済的動機からのものであった。つまり、貧しい家庭の女性が経済的に自立しようとすると、娼婦になるか男装し男性として働くほかなかったという当時の事情が異性装の大きな背景となっていたのである。もちろん、娼婦になるか男性として働くか、という選択肢は極端な象徴的な表現かもしれない。というのも、本書にも登場するが、女性の職業は娼婦のほかにも、洗濯婦やメイド（家政婦）などの仕事もあったからである。しかし、これらの仕事は経済的な自立するにはあまりにも収入が少なかったようである。このため、娼婦になることを拒否した女性たちは、男性と同様の賃金や契約金が貰える、兵士や水夫になるために異性装の道を選んだのである。

以上の事実は、当時の女性がおかれていた状況をも照らし出している。まず、当時、オランダ（ネ

ーデルラント）の、とりわけアムステルダムなどの都市は繁栄の絶頂にあったが、それでも女性の職業は非常に限られていたことがわかる。他方、海外進出にともない、兵士と水夫にたいする需要は常にあった。こうして、異性装の女性は当局の目をごまかしてまんまと兵士や水夫になることが出来たのである。このような事情を考慮してもなお、なぜこれらの女性は異性装までした命の危険まで冒して兵士や水夫となる道をえらんだのか、という疑問は残る。この疑問に答えるためには、異性装の背景をもう少し考える必要があろう。まず、異性装の女性たちはどのような境遇でどんなところからオランダの都市にやってきたのか、という点から考えてみよう。

著者たちによれば、異性装の女性の大部分は貧しい階層の出身であったという。当時は、ある年齢になると、貧しい家庭の女性は家計の負担を軽くするためにも、また結婚資金（オランダでは女性も持参金を用意しなければならなかった）を貯めるためにも、家を出てお金を稼がなければならなかった。また、本書が明らかにしている事実として、当時のオランダ（おそらく他のヨーロッパ諸国でも）では、出産その他の理由で母親が早く死亡してしまったり両親が離婚して片親となった家庭は珍しくなかった。このような場合、父親は早々に再婚するのが常だった。そこで、継母と子供たちとの関係がうまく行かず、子供たちがしばしば家出のような形で都市に流れ込んできた。ヨーロッパの古い童話には、継母による継子いじめの話が頻繁に登場するが、それはこのような事情を反映しているのだろう。加えて、当時は私生児もかなりいたようである。これらの女性は何らかの方法で生活費を稼ぎ、結婚資金を自分で貯めなければならなかった。こうした女性の多くは都市の裕福な家庭のメイドとなったり、洗濯婦となっていったようであるが、さらに多くの収入を望んだ女性たちは男装して男の職業に就いていったのである。

ところで、異性装の女性たちはどんな地域からきたのだろうか。最初のうち、オランダの南部地方から北部のアムステルダムなどの都市へやってきたようであるが、後にドイツやスカンディナヴィア諸地域からもやってきた。出身地が分かっている 55 人のうち 24 人はオランダ以外の地域からやってきたことから推察すると、当時は女性であっても国境を越えてかなり自由に移動していたことが分かる。近世ヨーロッパの女性がこれほど自由に移動していたとは想像しにくいが、実際には我われが考える以上に活発に移動していたことが分かる。

以上の動機とは別に、異性装が女性のセクシュアリティーの問題と結びついていた場合もあった。異性装者の中には、女性に求愛し、結婚にまで至った人たちがいた。当時のキリスト教の倫理は、男女のカップルだけが神に許されるというものであった。したがって女性どうしの性的関係はキリスト教倫理に反する行為で、死罪、鞭打ち刑、流刑など厳しい処罰の対象とされた。それにもかかわらず、女性と女性との間で恋愛関係や性的関係をもつ場合、当時の通念では、女性を好きになるということは、自分は男性でなければならないと考えられていたのである。また性関係は男性器と女性器の結合以外に考えられなかった。したがって、女性の同性愛は、観念としてさえ存在しなかったのである。このような観念と宗教的な規制のもとで、同性愛者、インターセクシュアル、トランスセクシュアルの女性が、心理的な抵抗を軽減する窮余の策として異性装という手段を用いることもあった。このタイプの異性装は、当時の性関係に関する社会的通念を知るうえで興味深い。

最後に、異性装の動機や背景とは直接には関係ないが、社会史的観点から興味深い問題を二つだけ挙げておこう。一つは、水夫や水兵となって東インド会社の船に乗り込み、無事にインドや東南アジ

アまで到達した異性装の女性がいたかどうか、本書は明らかにしていない。私の専門は東南アジア史であるが、このような事例に出会ったことはない。しかし、もし実際にアジア地域に到達した女性が実際にいたとすると、アジア地域の歴史研究にも新たなテーマを提供することになろう。二つは、当時のヨーロッパにおける情報の伝達についてである。本書では、世の中の出来事は新聞、うわさのほかに、唄によっても伝えられていたことが述べられている。とりわけ、ストリート・シンガーたちが唄を歌い、歌詞カードを売っていたため、民衆の間で事件や出来事が唄と活字の双方の媒体で確実に伝わり、後世まで記録として残り、また人々に記憶されることになったのである。

ここで取りあげた著作は、異性装という、一見特殊な問題を切り口として、ジェンダー、セクシュアリティー、民衆の、とりわけ女性の社会的地位や生活状況などを垣間見せてくれる。資料不足のため、通常はなかなか知ることのできない民衆の生活史の一端が、著者たちの粘り強い資料の収集と分析によって明らかにされている。本書は、まだまだ興味深く大切な社会史のテーマが残っており、丹念に資料を収集すれば、その研究が可能になるかも知れないことを示唆しているといえる。